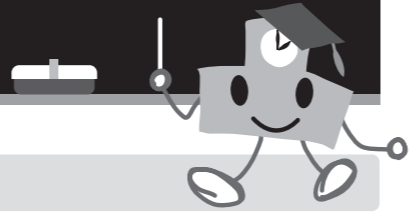


小学校の事例 南区 藻岩小学校

ビオトープでのメダカやドジョウ観察から、ライブカメラでの動物園観察へ。

ビオトープという身近にある「小さい森」から発展した授業に。動物観察を通じ、生命のつながりや生物多様性を学ぶ。



内容 子供たちの身近な「小さい森」で生物観察

本校は、創立100周年となる平成13年、札幌市の「学校ビオトープモデル整備小学校」として選ばれ、面積約204平方メートルのビオトープが建設された。ビオトープの池や川にはメダカ、ドジョウ、タニシなどの生物が生息し、ミズバショウやツリガネニンジンを始め多様な植物が繁茂する。子供たちは各教科の学習を深めたり、休み時間に自由に歩いて観察したりと、一年を通してビオトープに親しんでいる。

特に、4年生以上の児童20名前後で構成されている「科学クラブ」では、水を採取して顕微鏡で観察、生物のサンプル表を参照して生き物の生態について学ぶなど、熱心な活動を行っている。また、4年生の理科の学習では、ビオトープを利用して「水辺の生き物観察」を行っている。

ビオトープは、児童にとって身近にある「小さい森」。学校全体の教材として利用されているほか、水が流れているので、その水が奏でる自然な音が、子ども心に「心のうるおい」としてよい効果を与え、環境教育だけでなく、情操教育にも役立っている。



ビオトープの「池」

課題 安全を維持する管理体制づくり

ビオトープは安全管理の面に配慮しつつ、維持することが必要とされる。たとえば水場の土台となっている防水シートが劣化して水もれすることがある。水がないと「落とし穴」のようになり、子供たちがけがをするものになったり、植物が枯れてしまうというように、ビオトープ本来の姿を維持できなくなってしまう。昨年、シートに穴が空き、水もれした時には、教育委員会に相談し、補修したこともある。このような施設管理面では、学校で維持する体制を整備し、組織的に引き継ぐことが重要となっている。



「池」と教材園

効果 ライブカメラで旭山動物園の生き物を観察

本校ではビオトープの「生物の観察」から自然環境について学ぶ取組を発展させ、旭山動物園と学校をライブカメラで結び、飼育員さんの解説付きで動物園のようすが見られるという新たな取組を行った。夏・冬の2回、気候や環境の違いによる動物の変化や動きを観察し、子供たちは楽しく学ぶことができた。また、HTBの気象予報士による「環境について」の出前講座では、地球温暖化や雪についてなど、子供たちからの様々な質問に即座に答えてもらい、人間や動物、植物など、みんながつながりあって生きているということを考える、とても有意義な取組となった。



「川」にかけられた「木橋」


今後 これからも取組んでいきたい

現状は、授業時間数の削減などもあり、どの時間に、どのタイミングで実践していくかの調整が難しい。また旭山動物園との取組については機材の準備など、時間や費用はかかるが、子供たちのために教科と連動させた取組となるよう工夫していきたい。



池の水を循環させた「川」

広げよう
つなげよう
環境学習の輪



実施校から
メッセージ

愛着をもっていることをうまく環境に関連付けて、発展させると、子供たちはより興味をもつようになります。特に3~6年生は、自発的に調べることができるので、環境活動に発展させることは意外と難しくありません。

地域を軸にしたことや動植物に関わることを、子どもにわかるように進めていくこと、身近な環境を「自分たちがよくしていくんだ」と自覚をもてるように進めていくことが大切です。子どもにとって身近な地域の素材を、「身近な環境について考え、自分たちが取組んだことで変化した!」ということを実感できるよう、わかりやすく活用していくことが大切なのではないでしょうか。

広い意味で「生命」のために、生きていくために必要なことであるという意識をもてるように、一つ一つ取組んでいきたいと考えています。